

◆ 春一番が吹いた日に ◆

2月4日、気象庁は関東地方で過去最も早く「春一番」が吹いたと発表した。

未だに朝晩の冷え込みは厳しいが、日中は春の兆しが其処此処に感じられる日々も多くなってきた。この厳しい状況下でも正確に時は進む。



3年生の個別大学への出願も一段落ついた。賑わっていた校舎2階の「学習相談コーナー」も少し寂しそうに見える。最後まで丁寧な取組、戦略を大切にして過ごして欲しい。

さて毎年思うことだけれど、この時季は卒業へ向けての準備と、新たな仲間を迎えるためのサイクルが平行して進み、何とも気ぜわしい。特に卒業に向けては、ノスタルジックな気持ちが次第に大きくなっていく。

モーツァルトの歌曲『春への憧れ』（k.596）を想う。

以前触れた[k.595](#)のピアノ協奏曲の次のケツヘル番号。この協奏曲の第3楽章は、この歌曲の主題を用いた一見（一聴？）大変軽妙なもののだけれども、『モーツァルト、その人間と作品』（Alfred Einstein 浅井真男訳）によるとこれは（モーツァルト自身が）「最後の春だということを自覚した、諦念の明朗さ」なのだという。

飛び跳ねるような主題はいかにも「春が来ましたよ」というような感じで、特に何かにこじつけるようなものではないのかもしれないが、あの感傷的で澄みきった第2楽章と続けて聴いてみると、さもありなんという心持ちにもなる。

今日もそうだけれど、春一番の吹いた日も空がとても蒼くそして高かった。モーツァルトもこういった空を見上げながら、あの清澄な曲を書いたのだろうか。

今日から、入学願書出願受付が始まった。新たな仲間を向かい入れる準備も着々と進む。「暦の上ではもう春なのに まだまだ寒い日がつづく」（『暦の上では』 伊勢正三）……。卒業の季節がまた近づく。